石島　英著

台風学のすすめ

—沖縄からみた，台風
自然と風土—

新星図書(注)，1988年2月刊
A5版，232頁，2,400円

台風に関する一般書といえば，大谷東平著「台風の話」(1952，岩波新書)，山岬正紀著「台風——最もはげしい大気じょう乱」(1982，気象学のプロムナード・第1期シリーズ10，東京堂出版)，饒村曜著「台風物語——記録の側面から」(1986，気象協会)，村松照男著「台風をとらえる」(1987，ぼくらの天文・気象・地球19，岩崎書店)を思い出す．それぞれ，著者の個性がいかされた力作である．36年前に書かれた大谷氏の著作を別格とすれば，理論家の山岬氏は気象力学の立場から台風を見ている．調査官の饒村氏は，気象観測によって得られた具体的な台風の実態把握に重点を置いている．パターン認識に対して鋭い感覚を持つ村松氏は，レーダーと衛星の画像に台風を語らせている．

これだけ台風の本があれば，もう台風について書くことがないのではないかという先入観をもって本書を読み，新鮮な驚きを感じた．従来，私が知っていた台風像は，台風を外側から見た姿であった，という印象である．台風を人にたとえれば，ビジネスマンとしてのつき合いであった．これに対して，本書は台風を内側から見ている．それは，台風が生活の中に深く侵入している沖縄に長く生活し，沖縄の風土を深く愛し，かつ台風を自然科学の対象として研究している石島氏でなければ書けなかった視点である．著者は本書の準備に10年かけたと述べているが，10年というのは目に見える部分であろう．「沖縄からみた，台風自然と風土」という副題が示すように，本書は，有史以来，台風と深くつき合わざるを得なかった沖縄が，絶好の著者を得て自分自身と台風の深い長い関係を語ったという印象をもつ．

本書の構成は次の通りである．

第1章＝台風をさぐる，第2章＝台風の気候風土，第3章＝台風襲来と経路，第4章＝台風天気のことわざ，第5章＝台風の自然科学的関心，第6章＝台風維持のメカニズム，第7章＝台風への工学的関心，第8章＝渦の室内実験，第9章＝台風と地形，第10章＝台風シミュレーションの先がけ，第11章＝台風監視への努力，第12章＝台風の進路予想，第13章＝台風環境に育つ人々．

全体は13章から成るが，1章は導入，2章～4章，及び13章が沖縄の風土と関連が深い部分である．5章～12章は科学技術的色彩が強い．この部分にも，7章の工学的関心，8章の室内実験，9章の地形効果など従来の本に書かれることの少なかった点にスポットを当て，著者の関心の広さがよく出ている．特に，台風と地形の関係は，著者が学生時代から興味をもち，現在も気象学会で毎回精力的に発表されている研究テーマである．『地形が流れを責めると，流れは喰いつくだろう．「何も好きこのんで君にぶち当たっているのでない，大気のどこかに歪が生じ，そのため流れが生じた，そこで流れる流体としての役目を自然ににになって流れてきた，ところが，そこに君（地形）がおり，ぶつかっただけの話だ」というだろう．』というような表現は，活字を通して得た知識からだけでは書けない実感がこもっている．

といっても，このような感覚的な表現は多くない．全体的に，論理的で読み易い文章である．一般の読者が対象だから，力学的な表現には（上述の例に見られるような）工夫がこらされている．台風の位置エネルギーと内部エネルギーの和を「母体エネルギー」といいかえているのもその1つである．

著者の考えている台風学とは，台風という自然現象がもつ多面体のすべての面を総合的に見る知識体系である．気象学から見た台風像はその一面に過ぎない．本書には，台風と歴史とのかかわり，台風と生活，防災など人間との関係が強調されている．特に，13章では，台風観について述べた学生の作文が引用されており，1つ1つの作文に著作のコメントがついている．それを読むと，自然と人間に対する著者のあたたかい眼差しを感じる．

私は本書を読みながらこのような台風学を研究する台風研究所が沖縄に設立されることを夢想した．

（東大海洋研　木村竜治）

（注）書店を経ないで下記に注文することもできます
注文先：那覇市樋川(ヒガワ) 1-15-15
沖縄気象台予報課　上江洲(ウエズ)　司(ツカサ)　気付
石島　英あて
銀行振込先：沖縄銀行　国場(コクバ)支店
（普）1216968　石島　英(スグル)
（送料　著者負担）